芸能

豊竹英大夫

素浄瑠璃で「摂州合邦辻」

邪恋の真相は…

●……18日、大阪・大槻能楽堂

文楽期待の太夫、豊竹英大夫が初舞台から三十七年の今年、大阪・上町の大槻能楽堂で素浄瑠璃公演「英大夫の会」を開く。語るのは文楽屈指の人気作「摂州合邦辻・合邦住家の段」。丸ごと一段で約一時間二十分の大曲だ。「うまいこと語ろうなんて思てまへん。無報酬の愛の深さを描いたこの作品から、文楽という芸能のすごさを少しでも感じていただければ」―。（亀岡典子）

「合邦」は英大夫にとって特に思い入れのある曲という。祖父・豊竹若大夫が十八番にしていたこと、そして約三十年前、若手向上会でこの曲を勤めることになったとき、師匠の竹本越路大夫に厳しく稽古してもらった曲だからだ。

「それはもうボロカスに怒られました。ただその後も越路師匠から何回か教えていただいていますので、口伝は頭に入っています。それを自分の中できちんと整理し、思い出す作業をする意味でも、いまの時期、一度語ってみたいと思ったのです」。一言一言かみしめるように語ったあと、子供のような笑顔で「祖父の得意な曲でしたから僕のDNAの中に受け継がれているかもしれないでしょ」。

「合邦」は、義理の息子・俊徳丸に邪恋した玉手御前の悲劇の物語。危険を感じて姿を消した俊徳丸を探し求め、玉手は実家にたどり着く―。

「しんしんたる夜の道。恋の道には暗からねども、気は烏羽玉の玉手御前…」。頭巾で顔を隠し、恋しい男の行方を追って暗い夜道をたった一人しのんでやってくる玉手の姿が目に浮かぶ。

玉手の乱行に耐えかねた父・合邦は自ら娘を刺すのだが、実はすべてはお家乗っ取りの危機を救うための玉手の命をかけた策略であった。

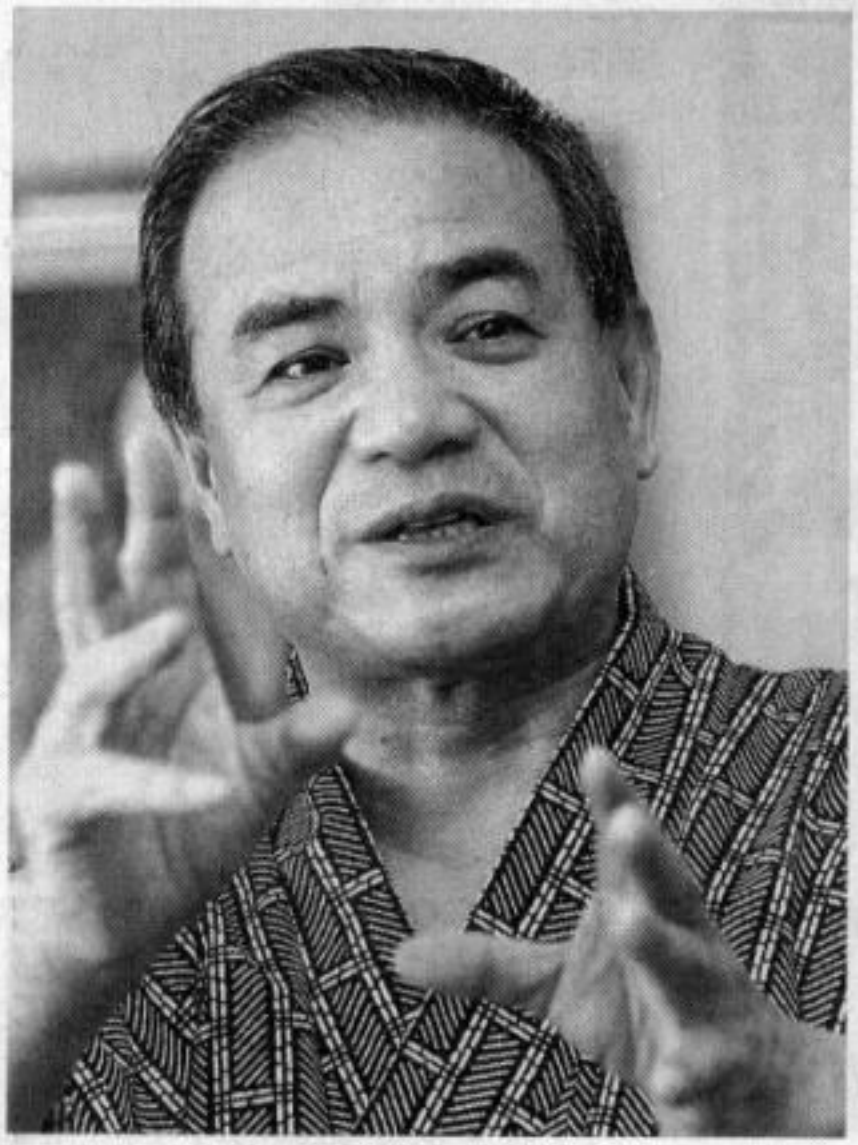
昔から玉手の恋は真実か嘘かが、議論の的になっている。英大夫は「絶対に玉手は俊徳丸のことが好きなんです」と断言。「ただ自分では気づいていないだけ。もし気づいていたとしても、当時の封建制度や倫理観では絶対に表には出せないことだった。玉手の行動の裏にはそういう悲しみが一本貫かれている。玉手は文楽に生きる奇跡の女性です」

語る上で難しいのは合邦という。「人の心の裏と表を表現するには語りの技術だけでなく、いろんな経験を重ねることも必要」

近年、本公演で大役を任される機会が増えてきた。昨年十一月の大阪・国立文楽劇場「仮名手本忠臣蔵」の通し上演では七段目の平右衛門を力いっぱい語った。また昨年から、呂茂大夫、希大夫という二人の弟子ができて責任も増えてきた。

「最近、文楽はすごい芸能やとつくづく感じますなあ。近松（門左衛門）はじめ当時の作者はあの時代に人間の本当の愛とは何か、許しとは何かという深遠なテーマに向かい、義太夫節で知らしめた。僕もこの素晴らしい芸能、文楽に邁進していきたい」

「英大夫の会」は十八日午後六時半から大阪・上町の大槻能楽堂で。三味線は鶴澤清友。ゲストは落語家の桂雀松。一席演じ、英大夫との対談もある。前売り三五〇〇円、当日四〇〇〇円。英大夫の会（☎072・761・8538）。



「能楽堂は浄瑠璃を語るのにいい空間」と語る豊竹英大夫